大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『鬼滅の刃』における鬼の時間と人間の時間

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川部, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017617

『鬼滅の刃』における鬼の時間と人間の時間

川　部　哲　也

1．はじめに

本論の目的は，私たちが生きている時間とは何だろうかという問いについて，少しだけ考察の歩みを進めることである。そのために，本論では素材として，漫画『鬼滅の刃』（吾峠呼世晴，2016-2020）を用いる。この作品に描かれた鬼と人間の対比を「時間」という切り口から論じることにより，私たち人間がどのような時間の相を生きているのか，臨床心理学の観点から論じてみたい。

まず，『鬼滅の刃』の物語を紹介する。その内容については，西嶋（2021）が適切かつ簡潔にまとめているので，ここにそのまま引用する。なお，（　　）で示しているのは読み方が難しい漢字に対して，筆者が付した振り仮名である。

『鬼滅の刃』は主人公である竈門炭治郎（かまど・たんじろう）が所属する人間の鬼殺隊（きさつたい）と，鬼舞辻無惨（きぶつじ・むざん）を始祖とする鬼たちの戦いを描く，大正時代を舞台としたダークファンタジーである。炭治郎には禰豆子（ねずこ）という妹がいるが，この禰豆子が鬼となってしまい，禰豆子を人間に戻す術を求めて兄妹で故郷を離れるというのが物語の発端である。

なぜ人が鬼になるのか。これについては，無惨の血を分け与えられた人間は鬼となるという設定がある。鬼となった者は日光を浴びることができなくなるが，その代わりに驚異的な身体能力や再生能力，あるいは血鬼術（けっきじゅつ）と呼ばれる特殊能力を得るに至る。特に鬼は，一部の例外はあるが，鬼殺隊の持つ日輪刀でその頚部をはねないことには絶命させられないという不死性を帯びている。（西嶋，2021，p.70）

西嶋の論は，主人公の炭治郎を「切腹をする者が苦しまずに逝けるようにその首をはねる役割を担う者」である「介錯人」と位置づけ，「鬼となった者たちの鬼としての生を終わらせる」存在と読み解いている。物語のなかでは，炭治郎の刃で頸をはねられた鬼は，死に際の一瞬に，鬼になる前の人としての記憶を取り戻す。そして最期は人として死んでいく。炭治郎は「成仏してください」と祈りを捧げる。まさに，鬼に人としての尊厳を回復させ，浄化する存在である炭治郎は「介錯人」なのである。炭治郎は，不死の鬼に対して「終わり」を与える者，すなわち不変のものに区切りを入れる存在であると論じられている点にも，筆者は賛同する。西嶋の論はさらに，『鬼滅の刃』という作品そのものが，私たちの今の状況に「節目，境界，終わり，そして新たな始まり」をもたらす役割を持つ可能性にも言及している。

さて，本論では西嶋の論を継承し，人間と鬼との対比をより際立たせるために，人間を「有限の生きられる時間」を持つ存在，鬼を「無限の時間」を持つ不死の存在として論を始めてみたい。この両者の対比を通じて，私たちが生きている時間について，いくつかの示唆が得られるのではないかと考えている。

2．鬼の時間と人間の時間

鬼の時間と人間の時間との間には，埋めがたい溝がある。そのことを説明するために，まず鬼の時間から述べる。鬼は人間よりもはるかに長い寿命を持っており，鬼の始祖である鬼舞辻無惨に至っては平安時代生まれである。1000年以上生きているにもかかわらず，外見が変わることがなく，無惨は「20代半ばから後半あたり」（16巻，第137話）の青年の姿を保っている。また，身体には再生能力があり，身体をどれだけ損傷してもすぐに元通りになる。力のある鬼ほど再生能力が高く，無惨の場合は，瞬間的に元の身体を取り戻すことができる。

一方，人間の時間は鬼の時間の長さと対照的に，有限であることが繰り返し表現されている。最も際立った対比が描かれたのは，鬼殺隊の炎柱である煉獄杏寿郎（れんごく・きょうじゅろう）と，上弦の鬼の一人である猗窩座（あかざ）との対決場面である。猗窩座は，煉獄に「お前も鬼にならないか？」と呼びかける（8巻，第63話）。「鬼になろう　杏寿郎　そうすれば　百年でも二百年でも　鍛錬し続けられる　強くなれる」。鬼になれば，長い寿命が手に入り，武芸の高みを目指すことができる，というのが猗窩座の主張である。しかし，煉獄はその誘いを拒否する。「老いることも　死ぬことも　人間という儚い生き物の美しさだ　老いるからこそ　死ぬからこそ　堪らなく　愛お

しく　尊いのだ」と述べ，「俺は　如何なる理由があろうとも　鬼にはならない」と。この煉獄の意見を猗窩座には理解できない。なぜ高みを目指す者が，老いによる衰えを受け入れ，短い寿命でこの世を去っていこうとするのか，と理解できないのである。ここに，人間と鬼がまったく異なる時間を生きており，生に対する価値観がまったく異なっていることを見て取ることができる。

ここで注意しておきたいのは，猗窩座の言う論理は決しておかしなものではないということである。むしろ猗窩座の主張には一理ある。武芸を極めたい者にとっては，負傷しない，老化しない身体は，理想的な身体といえるからである。歴史を紐解けば，古代の皇帝が夢見たのは，不老不死であった。栄華を極めた今の自分の力を，永遠に保持していたいと思うのは，人間として理解できる心情であるといえよう。ましてや，猗窩座は武芸の鍛錬に喜びを感じる存在である。いつまでも己を高める修行ができるのは，この上ない魅力であったに違いない。（ちなみに彼は上弦の参という，上弦の鬼の中でも上から3番目の位置にあり，上弦の壱（黒死牟（こくしぼう））と上弦の弐（童磨（どうま））に勝つという目標を持っていることが示唆されている。）

一方で，人間から見れば，鬼になるということは，人間であることを捨てるということである。今まで人間として生きていた者にとって，人間を辞めることは相当の心理的抵抗があるだろう。しかし，煉獄が鬼にならない理由はそのような心理的抵抗ではない。彼は，老いるからこそ，死ぬからこそ人間は愛おしく，尊いのだと語る。有限の生を慈しむ価値観である。人間としての枠を踏み越えることはせず，（鬼から見れば）短い寿命を全うすることに価値を置いている。あくまでも「人間としての時間」を貫く立場をとるのである。煉獄から見れば，鬼の長い寿命，再生する身体は，不自然なものであり，到底受け入れることができない。結果として，この戦いで煉獄は命を落とすことになる。しかし，それでも煉獄に後悔はない。次の世代である炭治郎たちを守ることで，自分の務めを果たしたからである。最期には亡き母親の姿に問いかけ，果たすべきことを立派に全うしたと認められる中で煉獄は絶命する。人間の時間感覚では，自分が命を終えたとしても，次の世代に継承するという意識が働く。一方，鬼の時間感覚はその意識がなく，いつまでも自分が存在し続けるということにこだわるという特徴がある。このように，人間の時間と鬼の時間は相容れないものである。この対比は，物語全体を通して繰り返し，繰り返し語られることになる。

3．人間の時間

『鬼滅の刃』においては「人間の時間」もまた，繰り返し表現されている。この種の少年マンガに珍しく，時間経過が丹念に描写されているのである。例えば，物語の序盤に炭治郎が元水柱の鱗滝左近次（うろこだき・さこんじ）の下で修行を1年，そこから更に錆兎（さびと）と真菰（まこも）による修行を1年，合計2年間の修行をしている（1巻，第3-5話）。多くのマンガで主人公が比較的すぐに強くなる（あるいは最初から最強の場合もある）のに対し，炭治郎の成長は決して早いとは言えない。長い時間，地道な修行を経て，やっと岩を斬るという課題を達成するのである。また，戦いで負った怪我もすぐには治らない。炭治郎たち一行が骨折を治すために藤の花の家紋の家で療養する場面（4巻，第27話），炭治郎の仲間である我妻善逸（あがつま・ぜんいつ）が蜘蛛の身体になりかかったのを回復させるために3ヶ月の間，薬を飲み続けなくてはならない場面（6巻，第48話）などがあり，その後も大きい戦いの後は，あまりの負傷の大きさのため，意識を取り戻すまでにかなりの日数を要している場面が描かれている。このように，『鬼滅の刃』では，人間の身体がすぐには回復しないことが何度も繰り返し描かれていることがわかる。

また，手足など失った身体は戻ってこないし，亡くなってしまった人は生き返ることはない。失ったものは決して元通りにはならない，というのが物語全体を通して描かれる人間の宿命である。これは素朴な「生きられる時間」であり，私たちの生活実感に根差した時間感覚であるといえる。ここでは鬼との対比を意識して，「すぐには回復しない人間の姿」そして「喪失を喪失として受け止める以外にない人間の姿」が描かれているといえよう。

4．鬼の時間

それに対して，「鬼の時間」は反対の性質を持っている。怪我をしても死ぬことがないという不死性を持っており，上級の鬼になると損傷した身体が即座に再生するという能力さえ持っている。また，鬼の始祖である無惨は，自分の血を分け与えることにより人間を鬼に変えることができるので，自分のコピーを増殖させることも可能となっている。それらの強大なアドバンテージを持つ反面，鬼は太陽の光を浴びると消滅してしまうという弱点を持つ。鬼は夜にしか活動することができないという意味で，一日の半分の時間をあ

らかじめ失っているのである。この喪失に耐えられない無惨は，太陽の光を克服することを至上の目的とした。筆者から見れば，欠点の一つや二つ，あっても良いのではと思われるのだが，無惨はそれを許さない。弱点を持たない完全無欠の存在になることを無惨は望んだのである。

さて，不死性を有していること，自己修復が可能であること，自分のコピーを作ることができるという性質は，何かに似ているといえまいか。筆者にはこれらは「システム」が持つ性質であるように見える。なお本論で言う「システム」とは，時間による影響を受けることがないという意味で「無時間」のものという意味で用いている。そして，人間を超えたところにあり，人間が存在するかどうかに関わらず，存在し活動し続ける仕組みのことである。ごく小さい単位のシステムで考えるならば，例えばコンピューターのデータがある。データは，時間によって劣化することがないという意味で不死である。コピーすることもでき，バックアップを取ることもできる。データそのものは作者がたとえ死んだとしても，残り続ける（ユーザーがいなくなっても存在し続けるSNSのアカウントがその好例である）。バックアップを取ることができるので，データがたとえ損傷したとしても，また元通りに瞬時に復旧することができる。その意味で，鬼の性質は，システムと似たところが多いといえるのである。

鬼の時間が変化を嫌うという性質も，物語のなかで繰り返し述べられている。例えば，無惨の部下である上弦の鬼のメンバー6名は113年間，成員の交代が起こらなかった。しかし上弦の鬼が欠けたことにより113年ぶりに上弦の鬼が集められた。その上弦の鬼たちに向かって無惨はこう語る。「私が嫌いなものは“変化”だ　状況の変化　肉体の変化　感情の変化　凡ゆる（あらゆる）変化は　殆どの場合“劣化”だ　衰えなのだ　私が好きなものは　“不変”　完璧な状態で　永遠に変わらないこと」（12巻，第98話）ここで，無惨が求めているものが永遠であることがはっきりと明言されている。自分の存在をいつまでも存続させようとする，不老不死への願いがそこにある。これを「時間」という観点で見るならば，鬼の時間はシステム的で不変の時間を志向している，と定式化できる。

ただし，この「鬼の時間」は，完全に永遠というわけではない。最後の戦いにおいて，無惨は珠世（たまよ）の作った薬によって，「老化」を体験する。1分で50年老いる薬により，無惨の身に9000年の老化が起こり，身体能力が低下したのである（21巻，第184話）。ここで初めて，無惨という究極の鬼であっても老化するというやや意外な事実が明らかになる。つまり，鬼は人間よりもはるかに寿命が長くはあるが，永遠の生命をもつ不老不死の存在ではない。もっとも，1万年を超える長い寿命であるため，私たち人間から見れば，「ほぼ無限に近い」と感じるほどであると言って差し支えないだろう。鬼の時間は無限ではなく有限だが，限りなく無限に近い，という時間なのである。

5．『鬼滅の刃』が描く2つの時間の決着

最後の戦いで，炭治郎たち人間は，無惨を倒すことに成功する（23巻，第203話）。その前に，鬼殺隊を統括する産屋敷耀哉（うぶやしき・かがや）は，自分の個体としての生命維持にこだわる無惨に対し，人間の時間を代表するこんな考えを述べている。「私は永遠が何か…知っている　永遠というのは　人の想いだ　人の想いこそが　永遠であり　不滅なんだよ」（16巻，第137話）。力強い言葉である。鬼から見れば，人間の寿命はごく短いものである。現実の世界を見ても実際のところ，医療技術の発達した現代であってもほとんどの人間にとって100年生きることは難しい。20代を過ぎれば体力は衰え，40代になるとどこかに慢性的な身体の不調を抱えながら生活することになる。60代になれば持病を得るに至り，その後はやがて病が進行した末に生命を終える。あるいは，老衰という形で緩やかに天寿を全うする。産屋敷一族は，代々短命の家系であり，産屋敷耀哉でさえ30年生きることができない。人生を30年と想定することは，舞台となる大正時代であっても短いと言わざるを得ない。ゆえに彼は，なおさら「次の世代へ継承する必要性」を強く感じていた。自分が死んだとしても，自分の想いを継承してくれる者がいれば，「不滅」なのである。なお，「滅」という文字は本作品中で繰り返し現れる文字である。タイトルにある「鬼滅の刃」に込められた意味も，単に鬼を討伐するというだけではあるまい。西嶋の論に従えば，鬼としての生を終わらせ，かつ同時に，人間としての生を終わらせるという二重の「終わり」をもたらす意味の「滅」であろうと考えられる。筆者はさらに論を進め，鬼が自分の存在を継続することに執着するのに対し，人間は自分の存在が終わってしまってもなお，自分の想いを継承していく人間がいるのであれば，それは別の形で生を継続していることになる，という洞察が「鬼滅」という言葉に反映されているように思われる。すなわち，鬼があくまで「個体」にこだわるのに対し，人間は「個体」にこだわらず，次の世代を信じ，バトンをつなぐ存在なのである。その意味で，鬼の存在のあり方そのものを

打倒するという意味で，「鬼滅」という言葉が用いられているのではないかと考える。

「次の世代へ継承する必要性」については，主人公の炭治郎にもよくわかっていた。柱としての自信を失っている冨岡義勇（とみおか・ぎゆう）に，炭治郎は「義勇さんは　錆兎（さびと）から託されたものを繋いでいかないんですか？」と問いかける。錆兎は，義勇と同期であるが，鬼殺隊になるための試験中に，義勇たちを守って一人命を落とした剣士である。炭治郎の言葉に，義勇は生前の錆兎とのやり取りをありありと思い出す。義勇を守るために，義勇の姉も命を落としていた。自分が死ねば良かったと言った義勇に，錆兎は厳しく伝える。「自分が死ねば良かったなんて二度と言うなよ（中略）お前は絶対　死ぬんじゃない　姉が命をかけて　繋いでくれた命を　託された未来を　お前も繋ぐんだ　義勇」(15巻，第131話)。ここでも，死者から託された想いを繋いでいくことが人間の生きる意味である，という強力なメッセージが描かれている。炭治郎も義勇も，人間としての限られた命をどう生きるか，ここで改めて自覚したといえよう。

以上の場面により，『鬼滅の刃』という作品は，人間が世代を超えて生命を継続しうるという時間意識に支えられた人間賛歌であると位置づけることができる。このことは，この物語だけにとどまらず，日本の伝統芸能などにある「襲名」というしきたりに同型の時間意識を見出すことができよう。このように，『鬼滅の刃』には，「個人」にこだわらない心性が色濃く現れているのである。

6．転調　『小林さんちのメイドラゴン』における ドラゴンの時間と人間の時間

やや唐突ではあるが，ここで一度話題を変えて，別の漫画『小林さんちのメイドラゴン（以下，メイドラゴンと略記)』を取り上げてみたい。この作品は，クール教信者という作者によるコメディ漫画であり，2013年5月から連載が開始され，現時点（2022年1月）も連載継続中である（12巻まで刊行済み)。2021年8月時点で，シリーズ累計発行部数は260万部を突破しており，2010年代後半から2020年代を代表する作品であるといえよう。さらに，京都アニメーションによりアニメ化がなされており，第1期は2017年（武本康弘監督)，第2期は2021年（石原立也監督）に放映されている。本稿では紙面の都合上，物語の内容に深入りすることは避けるが，『鬼滅の刃』と作品の設定が対照的であり，興味深いので，ここに取り上げる。

主人公は20代半ばのシステムエンジニアである女性「小林さん」である。彼女はひょんなことから異世界のドラゴン，トールと知り合い，以来，トールは小林さんの自宅にメイドとして住み込むことになる（そのままの姿では大き過ぎて家に入らないので，トールは魔法を使い，可愛らしい人間の少女の姿になる。小林さんもその可愛さを認めるほどである)。物語としては，小林さんとトールの共同生活を軸に，人間とドラゴンとの間のコミュニケーション（異種間交流）の食い違いが繰り広げられる。ドラゴンは異世界の住人であるから，当然，人間とは異なる価値体系を持っている。しかし，トールは小林さんに愛着を感じており，小林さんもまたトールを信頼していることがよく表現されている（例えば4巻，第36話)。お互いにわかりあおうと努力し，「異なる存在」同士の共生が描かれている物語である。『鬼滅の刃』が鬼と人間が決して共生しない物語であるのと，好対照をなしている。

ここで筆者が注意を向けたいのが，「寿命」である。ドラゴンの寿命は人間と比べてはるかに長い（2巻の第19話で，地球の寿命と同等という示唆があることから，少なく見積もっても数億年あるようである。鬼舞辻無惨よりも相当に長い)。その長い寿命ゆえに，トールは思い悩むことになる。トールは大好きな小林さんとずっと一緒にいることを願うが，「時々思うことがある　いつまで…「こんなこと」をしているつもりなの？――と　今を楽しんでいるのは間違いない　ずっとこの時間が続いていてほしいと願っている　でもそれはいつまで？（中略）もし――小林さんが　死んでしまったら…？」(2巻，第19話)。年老いることがないトールにとっては，自分より先に，愛する相手のほうが必ず先に寿命が尽きてしまう。永遠に一緒にいることはできない。そのような事実が突きつけられる。コメディ漫画には不釣り合いなほどに深刻な場面であるといえる。

そこでトールが出した結論は，それでも人間の世界に住み続けるというものであった。理由はいくつかあるのだが，最も大きい理由は，ドラゴンの世界に適応できなくなり，居場所を失ったトールに対し，小林さんに「じゃ　うちくる？」と提案され，居場所を与えられたことであろう(1巻，第2話)。この気持ちをトールは小林さんに語る。「ただそこに在るだけの心がこんなに安らぐだなんて知らなかった（中略）小林さんが無自覚なほど　私は嬉しいです　そんな簡単に私を救ってくれる人がいるんだって　小林さん…　大好きです　これからも…　ずっとずっと」(5巻，第48話)。そしてトールは，何気ない日常を小林さんと共に生きていく，と決意するのである。この決意は，小

林さんの命が尽きる日まで，ずっと共に生きていくという覚悟を伴っていると考えられる。

ここに，寿命の長いドラゴンと，寿命の短い人間とが，一緒に生きる時間は限られているけれども共に生きていこうとする姿勢がある。鍵となっているのは，お互いが自分にとって必要な存在であることを認識し，自分にとって理解が及ばない他者であっても理解しようとする姿勢を失わず，ただ「一緒にいる」ことを大切にするという，ただ「それだけのこと」である。小林さんが語る対人関係の綾は，示唆的である。人間の世界にやって来たドラゴンの少女，カンナが小林さんに不信感を向けた時の，小林さんの言葉。「知らない世界で　誰も信じられない…　当たり前だと思う　私だって信じない　誰かを信じるなんてさ　友達になったり　恋人になったりした後のことなんだよ　カンナちゃん　友達になろうなんて　言わないよ　一緒にいよう　そんだけ」（1巻，第6話）。これ以上の説明が不要なほどに,「一緒にいること」の意味を語っているように思われる。カンナはその言葉にうなずき，その場にいたトールは「私…　小林さんを好きになって　よかった」と心のなかでつぶやく。相互理解や信じることを前提にするのではなく，最初から相互理解などできないこと，信じられないことを前提にするところに，共生の鍵があるのかもしれない。

『鬼滅の刃』では,鬼と人間との共生はかなわなかったが，この物語では，ドラゴンの時間を生きるトールが，人間の時間を生きる小林さんと共生するという道をたどる。

『鬼滅の刃』との大きな違いは，ドラゴンの側に人間を理解しようとする心がある,ということである(また，もう一つの大きな理由は，鬼が人間を捕食するのに対して，ドラゴンは人間を捕食しなくても生きていけることである)。トールは人間の世界に合わせて，魔法で人間の姿となり，人間の生活の様子を観察し，学び取っていく。しかも多くの人間と交流し，それを楽しんでいるのである。その心がなぜ無惨にはなかったのか。それは，無惨が元々は人間であり，途中で鬼になったからであろう。人間だった頃に病弱だった無惨（15巻，第127話）は，周囲の健康な人間を憎んでいたに違いない。人間への憎悪が初めからあったからこそ，人間を理解したいと思う選択肢は初めから存在しなかったのである。人間はまったくの異種族ではなく，自分のルーツでもあるため，自分のルーツを否定することにより，鬼を続けることができたとも考えられよう。

このことは，臨床心理学的に見て興味深い事象である。すなわち，過去に人間だった者が人間を理解する心を持たず，一度も人間だったことがない者が，人間を理解しようとするという事態を示している。例えばうつ病を経験したセラピストが，うつ病のクライエントの心を必ずしも理解するとは限らない。かえって自分のつらかった経験を想起するがために，うつ病の症状を呈する人と接するのが苦しくなるかもしれない。たとえ共感することに成功したとしても，その共感は当の相手に対して寄せているものか，過去の自分に対して寄せているものか，判然としない。おそらく両方への共感が必要となるぶん，単純な共感よりも難しいものになるだろう。一方，自分のまったく知らない病や症状に対するほうが，かえって共感が容易となることがある。セラピストが自然に謙虚な姿勢となり，「まったくわからないので，教えてください」とクライエントから学ぶ姿勢が発動するからである。トールが人間を理解しようとするがごとく，セラピストはクライエントを，ある意味で自分とは異なる種族の存在として見ることにより，かえって共感が可能になるといえよう。

7．転調2　『葬送のフリーレン』におけるエルフの時間と人間の時間

また他の漫画の例を挙げたい。『葬送のフリーレン（以下，フリーレンと略記)』という漫画である（原作；山田鐘人，作画：アベツカサ)。2020年4月から連載を開始しており，現時点（2022年1月）も連載継続中である（6巻まで刊行済み)。2021年11月現在で5巻までの累計発行部数は450万部を記録しており，2021年マンガ大賞を受賞している。これもまた2020年代を代表するマンガであるといえよう。紙面の都合上，作品の内容の詳述は控えるが，この物語も「寿命」がテーマの興味深い物語である。主人公はフリーレンというエルフ種族である。少女の姿をしているが，実際は1000年以上生きている。エルフは人間よりも寿命がはるかに長いのである。80年前に，彼女は勇者ヒンメルとその仲間と共に魔王を討伐した経歴を持つ。勇者ヒンメルは人間であるがゆえに，フリーレンから見ればあっという間に老いてしまい，生涯を閉じてしまう。ヒンメルの葬儀に際して，フリーレンには何の感情も湧いてこない。彼女からすれば,「だって私，この人の事　何も知らないし…　たった10年一緒に旅しただけだし…」というわけである。寿命が長いエルフにとっては，10年は一瞬の出来事である。私たち人間の時間に換算すると，数日一緒にいた程度になるのだろう（もしかすると，修学旅行で同じ班に

なったという程度の認識かもしれない)。これほどまでにエルフの時間と人間の時間には大きな違いがある。

興味深いのは，以上のエピソードが「第1話」であることである。過去に勇者であった一人の人間が亡くなるところからこの物語は始まるのである。フリーレンはヒンメルの葬儀の後，「…人間の寿命は　短いってわかっていたのに…　…なんでもっと　知ろうと思わなかったんだろう…」と涙する（1巻，第1話)。この涙は，敬愛するヒンメルを失ったことに対してではない。自分が人間について何も理解していないという驚き,そして,これまで人間を知ろうとしてこなかった後悔の涙である。10年行動を共にしていたのだから，人間を理解することができたかもしれない。なのに，その発想も出てこなかった。そんな自分への後悔である。そして，人間を知るためにフリーレンは旅に出る。

この物語は，現在の場面と過去の場面が交錯しながら進むという不思議な描写が行われる（なお，現在の場面の枠は白であるのに対し，過去の想起シーンは枠が黒で表現されるので，読者が混乱するということは起こらない)。この不思議な描写は,「現在のフリーレンの体験」が,「過去の（勇者ヒンメルたちとの）体験」と重なり合っていることを示している。まるでプルーストの『失われた時を求めて』において，一片のマドレーヌから過去をありありと想起する現象のように，現在の体験に過去の想起が重なり合っていくのである。フリーレンは旅を進めていくうちに，あの時ヒンメルが語ったこと，あの時ヒンメルがしてくれたことを次々と思い出していく。一度経験したはずの過去と，再び新たに出会い直すという体験になっている。

例えば，フリーレンは魔法を集めるのが趣味であるが，それが趣味になった理由は，かつてヒンメルがフリーレンの集めた魔法を褒めてくれたからであった(1巻，第3話)。ヒンメルは頻繁に自分とその仲間たちの銅像を各地に作って回っていたのであるが，その理由は，後世の人間に自分たちが実在したことを伝えるため，そして「フリーレンが未来で一人ぼっちにならないようにするため」であった（2巻，第13話)。ヒンメルは，世代とともに記憶が風化していくことを知っていた。人間にとっては，80年もすれば過去にいた者たちのことをすっかり忘れてしまうのである。(私たちの多くは，両親や祖父母の世代まではリアルな記憶として残っているが，80年前に存在していたであろう曽祖父母，そしてより以前の世代のことは，何も知らないのがほとんどではないだろうか。私たちは，曽祖父母の名前を知っているだろうか。これほどまでに，記憶の風化は早く，人間は容易に過去を失ってしまうのである。）ゆえにヒンメルは，自分たちの死後にフリーレンが一人になってしまうことを見越し，なんとかしたいと願った。自分の死後，残された者を思うのが人間である。フリーレンは人間の大切な心理を知ったに違いない。

そのようにフリーレンは，ヒンメルの生前の言動を思い出していくにつれ，人間のこころを理解していくようになる。弟子を取ることについて「時間の無駄だからね。　色々教えても　すぐ死んじゃうでしょ。」と断言していた彼女（2巻，第8話）が，弟子を取ることになったり，人間の死に対して何も感情が湧いてこなかった彼女が，戦いで命を落とした戦士たちに祈りを捧げたり（3巻,第23話）といった変化が起こる。そして次第にヒンメルとの思い出が大切なものになっていく。ヒンメルから貰った指輪を失くしたために懸命に探すようになり（4巻，第30話),「私はヒンメル達に　旅立つ勇気と，仲間と過ごす楽しさを教えてもらった。」とヒンメルから得たものを語れるようになっていく（4巻，第35話)。

以上より，この物語に描かれているのは，人間を理解しようとする心がどのようにして立ち上がってくるかというプロセスと考えられる。『メイドラゴン』の場合は，たまたまドラゴンがすぐに人間を理解しようとしてくれたが,『フリーレン』ではそう簡単に話が進まない。人間が亡くなって初めて，人間を理解しようという意識が生じたのである。愛する人間が死んでしまうことは,『メイドラゴン』においてもっともトールが恐れていた事態である。その先のことは，トールは考えていない。考えることができない。しかし,『フリーレン』は「その先」の物語を描こうとしている。一言で表せば,「失って初めて，その人物と出会うことができる」という言葉になる。逆説的ではあるが，その人物を失うことで，初めてその人間が語っていたこと・教えてくれたことを深く理解でき，生前よりも生き生きとした存在として，その人を感じることができる。このようなことを，フリーレンの物語は教えてくれているように考えられる。

8．総合考察

ここまでの論をまとめると，まず『鬼滅の刃』における鬼の時間と人間の時間の相容れなさを「無限に近い長さを持ち，個体の存続にこだわるシステム的時間」と「短く有限ではあるが次の世代に継承する時間」の対立と見なした。物語は人間の時間が鬼の時間を打

倒し，人間が勝利する。そしていったん論を別の物語に迂回させ，『小林さんちのメイドラゴン』と『葬送のフリーレン』に目を向けると，寿命の長いドラゴンやエルフの時間と，寿命の短い人間の時間との間に対立が起こっていないことを示した。ドラゴンのトールは，自分とは異なる人間の価値観を認める心を持ち，エルフのフリーレンは，喪失を経た後に，人間を知るための旅に出る。そこには，自分と異なる存在こそ理解可能という逆説，喪失して初めて出会うことができるという逆説がそれぞれ挙げられていると考えられた。そして，この2つの物語では『鬼滅の刃』で叶うことがなかった「鬼の時間」と「人間の時間」が対話しているような印象さえ受ける。鬼と人間とが理解しあえる接点は本当にあるのだろうか。

この問いに対する筆者の結論を先に述べると，基本的には理解しあえる接点は無いと考える。ただし，ある条件のもとにおいては理解しあえる場合があると考える。以下，どういう理路でそうなるのかを説明する。

『鬼滅の刃』と『メイドラゴン』『フリーレン』には決定的な違いがある。それは作品中に死生観が描かれているか否かである。『鬼滅の刃』においては，登場人物が死を迎える際の様子がきわめて丁寧に描かれているのである。その死が人間の死であっても，鬼の死であっても，人生の終わりにふさわしい形で描写される。西嶋（2021）は，炭治郎が討伐した鬼（累，妓夫太郎と堕姫，猗窩座）の死について論じている。「頸をはねられ鬼としての肉体が崩壊していく最中に，人であった頃の記憶が蘇る。蘇る記憶とともに，回想の中で己が家族や恋人と再会を果たすことになり，最期には人であった頃の姿で地獄の業火に包まれる」。彼らは人をあまりに多く殺めてきたため，地獄の業火に焼かれる運命にあるが，最期には人生において大切だった人と一緒になれる。累は両親と，猗窩座は許嫁の恋雪（こゆき）と一緒になる。また，人間の側にも，死を迎えるときには，先に逝った家族や仲間と一緒になる場面が描かれている。そして最終巻では，登場人物の生まれ変わりと思われる存在が描かれており，人は個人としての命を終えたとしても，必ずまた別の命となって生まれ変わることが示唆されている。この物語は鬼にも人にも救済の可能性を示し，構造的に「不滅」を描いているといえよう。

ここから論理を一言で取り出すとすれば，「人は真に喪失することによって初めて，不滅を得ることができる」。つまり，喪失がなければ，得ることもできないのである。ただ，「喪失」が何かを表現することは現代においてとても難しい。その点，『鬼滅の刃』では，死んだその後の場面（あの世）を描くことによって，「喪失」を描きだしているといえる。作者である吾峠呼世晴の死生観がそこに現れている。

一方，『メイドラゴン』と『フリーレン』にはそういった死生観の描写は見られない（連載が継続しているため，この先描かれる可能性もなくはないのであるが，おそらく無いのではないかと筆者には思われる）。死生観抜きの世界観は，奥行きに乏しく，表面的なものにならざるを得ない。しかし，その奥行きに乏しい世界観は，実は2000年代あたりから徐々に勢力を伸ばしてきている，東浩紀（2007）が「ゲーム的リアリズム」と名付けた現実感覚に通じるものがある。東がその発生源をオタク文化であると論じた2000年代から20年を経て2020年代を迎えた今，その勢力はもうオタク文化ではなく，若者の文化の主流になってきているのではないかと筆者には思われる。例えば，若者の間で「世界線」という言葉が日常語になりつつあるが，この用語は元々は理論物理学用語であったが，転用されて今ではパラレルワールドを前提とした用語となっている。具体例を挙げると，ある人物に出会った場合と，出会わなかった場合とがありうるとすれば，その時間を境に「出会った世界線」と「出会わなかった世界線」とに分岐するという世界観である。まさにゲーム的リアリズムであり，ゲーム的世界観であるといえよう。そこでは無限に世界線が分岐していき，並行する世界が増えていく（森見登美彦（2005/2008）『四畳半神話大系』ではその世界観が見事に描かれている）。死生観を問うような「奥行き」は発生せず，延々と「並行する世界」が増殖するのである。この奥行きのなさが，死生観なき世界観の特徴である。

この奥行きのない世界観は，一見すると薄っぺらで浅はかなものに見えるかもしれない。しかし，この世界観の強みは，「鬼の時間」と「人間の時間」の対立を曖昧にし，共存可能なものとする点にある。2020年代である現在，世の中でいろいろな差異が消えていっている時代である（例えば性別の差異や，健常と障がいの差異，芸能人と一般人の差異は20年前とまったく変わっているといえるだろう）ことを考え合わせると，この世界観は2020年代の主流といっても差し支えないのではないだろうか。そこでは本来相容れるはずのない「鬼の時間」と「人間の時間」の共存が可能となる。対立を呑み込むことができる，新しい世界観である。

一方で，（少し唐突な考えとなるかもしれないが）もしも『鬼滅の刃』の世界観から2020年代（令和時代）の世界を見ると，どのように見えるか想像してみ

たい。おそらく,2020年代の世界は完全に「鬼の時間」に覆われているように見えるだろう。人生における喪失を喪失として捉えるのではなく,「世界線」の選択を間違っただけ（つまり，正しい選択をしていれば喪失は起こらなかったという考えを持つ）と捉える。これはゲーム的な「システム」を前提とした考え方であるといえる。この考え方が優位な2020年代の世界は，炭治郎なら「鬼の時間」であると断定するのではあるまいか。ただし，厳密に考えれば,「鬼の時間」はシステム的無時間とイコールではない。鬼もまた（人間よりはるかに寿命が長いとはいえ）有限の寿命を持つ存在だからである。しかし，無惨の次の言葉を聞いてほしい。「鬼の時間」は時として，まったく人間の時間を無効にするような，無時間の思想に属するような台詞を吐くのである。「私に殺されることは　大災に遭ったのと　同じだと思え　何も　難しく考える必要はない　雨が風が　山の噴火が　大地の揺れが　どれだけ人を殺そうとも　天変地異に復讐しようという者はいない　死んだ人間が　生き返ることはないのだいつまでも　そんなことに拘っていないで　日銭を稼いで　静かに暮らせば良いだろう（略）」(21巻，第181話)。この言葉に炭治郎は「無惨　お前は　存在してはいけない　生き物だ」と返す。「腹の底まで厭悪(えんお)が渦を巻いた」のである。無惨から見れば，人の死は，死因が天災によるものであっても，無惨が殺めたものであっても，すべて同じなのである。これは人間を超越した無時間的な「システム」の考え方としては，実は正しい。もし私たちが人口をカウントする公務員だったとすれば,「本日の死者」は数字でカウントすべきだからである。亡くなった人が，有名人だったとしても,無縁の人だったとしても,自分にとってかけがえのない人であったとしても，人口統計にすればすべて同じ「1名の死者」なのである。これが「システム」の考え方である。無惨は長い寿命を持つがゆえに，有限の存在ではありながら，ゲーム的な無時間的世界への移行を促す存在であるといえる。いわば炭治郎は，そのゲーム的な世界観への移行を断ち切り，古来の「人間の時間」を取り戻す。これが『鬼滅の刃』の物語で達成した時間論である。

一方で，ゲーム的かつ無時間的な「システム」の考え方に合わせ,死生観の奥行きを失くした世界観が『メイドラゴン』と『フリーレン』である。そこには人の情が無いものの，システム的に差異が取り払われた世界であるがゆえに,従来は相容れることがなかった「鬼の時間」と「人間の時間」という世界観の共存が可能となることが示唆されている。

以上より,『鬼滅の刃』に見られるように死生観に支えられた世界観においては，鬼と人間とが理解しあえる接点が基本的には無いが，死生観などの奥行きを失くし，物事の差異を取り払ったゲーム的な世界観においては，鬼と人間との対立が起こらず，理解しあって共存するという可能性があることになる。先に挙げた，メイドラゴンのトールが人間の寿命について思い悩むシーンや，フリーレンが人間を知ろうと決断するところには妙に人間味が感じられる。このように，異種族であるはずのドラゴンやエルフの心理に，いつの間にか人間の心理が組み込まれていることも，異種族と人間との差異が消失しかかっていることの証左であるとも考えられよう。

このように，時間という観点から『鬼滅の刃』における鬼の時間と人間の時間について詳細に検討を加えてみると，そこには逆説が含まれていることが明らかになった。特に，鬼の時間は個体の永続にこだわるがゆえに，却って滅びることとなり，人間の時間は個体の永続にこだわらず，次の世代へと命をつなぐことにより，却って永遠を実現することが可能となる。『鬼滅の刃』は人間の時間が鬼の時間を打倒する物語である。鬼の時間で表わされていることは,もう一つあり，人間の時間をシステム的時間，つまりゲーム的で無時間的な世界観に移行させようとする力である。炭治郎はその力を阻止することに成功したといえる。2020年代の人々の多くは，ゲーム的な世界観に同意しているのが現状であるが,『鬼滅の刃』はあらためて，その世界観の移行にストップをかけ,「人間の時間」つまり有限の生きられる時間を取り戻そうという物語であると考えられる。この動きは，現代の意識の流れに逆行するものであると思われるが，このような逆行する主体性を持つことが現代においてはきわめて重要であると考えられる。臨床心理学的に考えるならば，現代の心理療法にはこの主体性を治療者が持つことが重要になっていると考えられる。

現代はいよいよ現実とバーチャルの差異がなくなっていく方向にあると思われる。奇しくも2020年からのCOVID-19の流行により,執筆時現在(2022年初頭)，対面とオンラインとの差異もなくなっていきつつある。このように現実の世界の大半が「システム」に覆われつつある現代において,『鬼滅の刃』で示された「鬼の時間」と「人間の時間」の対立は，新たな世界観の下では対立せず，共存を図るという新たな局面を迎えているように思われる。その中で，治療者としてどのような主体性を発揮することができるかが今後の課題であると考えられる。

文献

東　浩紀（2007）．ゲーム的リアリズムの誕生．講談社現代新書．

吾峠呼世晴（2016-2020）．鬼滅の刃．（1巻～ 23巻）集英社．

クール教信者（2014-）．小林さんちのメイドラゴン．（1巻～ 12巻）双葉社．

森見登美彦（2005/2008）．四畳半神話大系．角川文庫．

西嶋雅樹（2021）．新型コロナウイルスと『鬼滅の刃』．ユング心理学研究，**13**，67-78．

山田鐘人（原作）・アベツカサ（作画）（2020-）．葬送のフリーレン．（1巻～ 6巻）小学館．

（2022 年 1 月 11 日受稿，2022 年 1 月 26 日受理）